

## 『稽山承語』朱得之述（一）

永富 青地

水野 実・

三沢三知夫

### 解題

本書の記述者と記される朱得之は、『明儒学案』に南中王門の学者として略伝及び学説が紹介されている。王守仁（陽明）の直弟子で、字は本思、号は近斎、江蘇省靖江の人。官吏としては江西省新城の丞（次官）になったにとどまり、生歿年は詳かでない。またその学説は道家的であったと言うが、『老子通義』・『莊子通義』等の著述もあり、このことを窺わせるに足ろう。ところが、守仁の「年譜」（王文成公全集巻三二）にも彼の名は見えず、従って彼の従学時期も定かでない。が、本書の検討によって、彼の守仁の門人たる確証が得られると同時に彼の従学の時期・守仁の所言の時期を限定することは不可能ではない。

書題の「承語」とは守仁の教言を得之の立場から言ったものであろう。本書の内容も十分これに見合うもので、一見して守仁の語録と知られる。また「稽山」はその場所を指すものであろう。が、稽山は守仁の郷里浙江省紹興にある名山、会稽山の略称で、その持つ象徴性に鑑みれば、必ずしもその山中を指すと見る必要はなく、守仁の郷里を指すものとしてよいであろう。全体で、守仁の郷里において得之が聞いた守仁の教言ということになろう。

さて、守仁が思想活動を始めて後、郷里に立ち寄ったことは三度ほどあるが、長く滞在したのは正徳十六年（一五二一）八月以降のことである。この時も初めは南京赴任途中の一時的なものであったが、父龍山公の死、夫人呉氏の死と不幸が続き、またこの間に自病の昂進も加わり、結局彼がこの地を離れたのは嘉靖六年（一五二七）の九月思田征伐に出陣時であった。所謂居越時代の六年間である。従って本書所録の内容はほぼこ

の間のものとしてよいであろうし、得之の従学時期もほぼこの間のことと推察される。

またこの間の嘉靖三年（一五二四）には門人南大吉によって稽山書院が修復されている。ここに四方から守仁の門人が来集し、守仁も屢々講会を催して盛興であった様子は、「年譜」（同上）から伝わってくる。書題の「稽山」はこの書院との関係で理解すべきかもしれない。とすれば、本書の内容はさらに期間を限定して考えてよいことになり、また得之の従学時期もさらに期間を限定してよいことになろう。

ところで、本書には時期を明記するものが三条あり、ほぼ上述の推察を裏づけるものとなる。先ず一〇条の文末には、

此れ乙酉十月、宗範、正之、惟中と与に待坐する時に聞く者にして、・・・。

とあり、所引の上言は嘉靖四年（一五二五）のものと思われる。また三四条の冒頭には、

丙戌春莫、師、諸友と共に香爐峰に登る。

とあり、後言は嘉靖五年春のものと思われる。また四一条の冒頭にも、

嘉靖丁亥、得之將に帰を告げんとして益を請ふ、・・・。

とあり、嘉靖六年に得之は守仁の下を去り、恐らく郷里に帰ったことが推し量られる。本書の所言はこの時以前となろう。また守仁の出陣が同年の九月であることから、さらにこの月以前のこととなる。さらに既引の一〇条の後には、

丁亥七月、追念して之れを記すも、已に渺茫に属し、当時の積然たるに若かず、・・・。

とあり、上引と合せ考えれば、すでに七月には帰省している様子も伝わってくる。

以上の本書からの引用によって、得之が嘉靖四年十月から、嘉靖六年の前半まで守仁に従学したのは確実となろう。従ってまた本書の所言はこの間のものであることも確実となろう。

実際の従学期間の上限はこれよりどれほど溯ることができるか不明で、所録の期間の上限も未定となるが、ともかく守仁の「致良知説」提唱以降の晩年の思想を伝えるものとして十分意義があろう。

さて、『学案』の「明経朱近斎得之」の項の「語録」には得之所録の守仁の言六条を収録し、また同項の「尤西川紀聞」には尤氏の所伝になる得之所説の守仁の言六条を紹介する。「語録」の六条の所言は、すべて本書にはほぼ一致するものがあるが、「紀聞」の六条の所言は全く一致するものはない。後者の件はともかく、前者における事実は本書の信憑性を保証する資料であろう。

本書の守仁の所言は、得之の思想的傾向から偏向を来す可能性があろうし、また「紀

聞」の守仁の所言は、尤氏を通した間接的なもので誤聞の可能性も大きく、これらの点には留意する必要がある。しかし、いずれも得之所伝の守仁の言として、十分価値を有するもので、守仁の思想解明に役立てるべきものであろう。また王学流伝の様子を伝えるものとして再認識する必要もあろう。

本書の所在を確認したのは、今から二十年程以前のこと、旧都立日比谷図書館（現在都立中央図書館）の河田文庫においてであった。『陽明先生遺言録』と合わせて一冊とした写本で、本書の末には佐藤一斎の奥付けがあり、天保八年（一八三七）、関東刻『陽明文集』所収からの筆写したものと知られた。すべて一卷、五十五条である。

本書の刊本（関東刻『陽明文集』所収）は現在日本に存在しないようである。が、台湾の国立中央図書館、中央研究院歴史語言研究所に現存しており、そのコピーの入手を希望したが、許可されなかったのは誠に遺憾であった。一斎本の他に現在日本には写本の異本が存在する。一本は東北大学図書館の狩野文庫本であり、一本は広島大学教授吉田公平氏の秘蔵本である。前者は先年そのコピーを入手しており、後者は北京大学教授陳来氏によって昨年公開された。なお両本に異同はない（北京大学教授陳来氏所言）。

『遺言録』は永富青地（現在早稲田大学講師）・三沢三知夫（現在早稲田大学大学院）の両君の協力を得て現在訳註の作業を進行中である（『防衛大学校紀要』七〇輯～）。この書に劣らぬ本書の意義に鑑みて、同じメンバーでこの訳註を施す作業に取り組むことにした。なお本書の体裁は、先ず最も善本と思われる「一斎本」を定本にしてその原文を翻刻し、それに訓読を施し、語釈として難語の解説、出典を明記することにした。また「校異」（一）として「狩野文庫本」（「吉田氏本」）との異同を記し、またその（二）として守仁の遺言、遺文に同類のものがあれば、その異同を記すことにした。また、字体に新漢字を採用したのは不本意ながら昨今の出版事情に鑑みたものである。

水野 実

『檀山承語』(一～二一条) 訳注

[小序] (訳者の仮称)

伝於師、習於心。是故書紳之士已非得意忘言者伍矣。矧茲又出書紳之下乎。惟予衰耗、莫振宗風、追述之。永心喪也。

[訓読]

伝は師に於てするも、習ひは心に於てするなり。是の故に書紳の士は已に意を得て言を忘るる者の伍に非ざるなり。矧んや茲に又た書紳の下に出づるをや。惟だ予衰耗し、宗風を振ひ、之れを追述すること莫し。永らく心喪するなり。

[語釈]

- 書紳 忘れないように書き留めること。『論語』衛霊公に、「子張書諸紳。」(子張、諸を紳に書す。)とある。「紳」とは太い帯のこと。疏に、「紳、大帯也。」(紳とは、大帯なり。)とある。帯にメモをして、備忘とするのである。
- 得意忘言 意義を自分のものとすれば、言葉に表わす必要はないということ。『莊子』外物。
- 伍 なかま。
- 心喪 喪服をつけずに、心の中で喪に服すること。師に対する喪。『礼記』檀弓上。

[校異一]

「狩野文庫本」(「吉田氏所蔵本」)との字句の相違はない。

[一]

問、正其不正、以致其良知於事物相接之時、其工夫則有著落矣。事物未相接時、如何用功。師曰、只是謹独。

[訓読]

問ふ、其の不正を正すに、以て其の良知を事物相ひ接するの時に致せば、其の工夫は

則ち著落有り。事物未だ相ひ接せざるの時は、如何に功を用ひん、と。師曰く、只だ是れ謹独のみ、と。

〔語釈〕

○著落 落ち着くこと。

○謹独 本来は「慎独」につくる。『大学』誠意の章・『中庸』首章。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

〔二〕

問、格物以致其良知、謂之学。此知行合一之訓也。如学而不思則罔、思而不学則殆、何如。曰、正言知行不一之弊。中庸言道之不明不行、亦言知行不一之故乎。曰、然。故曰、人莫不飲食也、鮮能知味也。

〔訓読〕

問ふ、物を格して以て其の良知を致す、之れを学と謂ふ。此れ知行合一の訓へなり。学びて思はざれば則ち罔く、思ひて学ばざれば則ち殆しの如きは、何如、と。曰く、正に知行一ならざるの弊を言ふなり、と。中庸に道の不明不行を言ふは、亦た知行一ならざるの故を言ふか、と。曰く、然り。故に曰く、人飲食せざるは莫し、能く味を知るもの鮮きなり、と。

〔語釈〕

○如学而不思則罔 『論語』為政。

○道之不明不行 『中庸』四章に、「子曰、道之不行也、我知之矣、知者過之、愚者不及也。道之不明也、我知之矣、賢者過之、不肖者不及也。人莫不飲食也、鮮能知味也。」（子曰く、道の行はれざるや、我之れを知れり、知者は之れに過ぎ、愚者は及ばざるなり。道の明かならざるや、我之れを知れり、賢者は之れに過ぎ、不肖者は及ばざるなり。人飲食せざるは莫し、能く味を知るもの鮮きなり、と。）とある。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【三】

師曰、千聖伝心之要、只是一箇微字、所謂不覩不聞也、是所謂道心也。惟精惟一、只是存此致此而已。

〔訓読〕

師曰く、千聖伝心の要は、只だ是れ一箇の微の字にして、所謂覩ざる聞かざるとは、是れ所謂道心なり。惟れ精惟れ一とは、只だ是れ此を存して此を致すのみ、と。

〔語釈〕

○一箇微字 『尚書』大禹謨に、「人心惟危、道心是微、惟精惟一、允執厥中。」  
（人心惟れ危ふく、道心是れ微かなり、惟れ精惟れ一、允に厥の中を執れ。）とある。

○不覩不聞 『中庸』首章に、「是故君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞。」  
（是の故に君子は其の睹ざる所を戒慎し、其の聞かざる所を恐懼す。）とある。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【四】

謙虛之功与勝心正相反。人有勝心、為子則不能孝、為臣則不能敬、為弟則不能恭、与朋友則不能相信相下。至於為君亦未仁、為父亦未慈、為兄亦不能友。人之惡行、雖有大小、皆由勝心生出。勝心一堅、則不復有改過徙義之心矣。

〔訓読〕

謙虚の功と勝心とは正に相ひ反す。人、勝心有れば、子と為りては則ち孝たること能はず、臣と為りては則ち敬たること能はず、弟と為りては則ち恭たること能はず、朋友に与かりては則ち相ひ信じ相ひ下ること能はず。君と為りても亦た未だ仁ならず、父と為りても亦た未だ慈ならず、兄と為りても亦た友たること能はざるに至る。人の悪行は、

大小有りとも雖も、皆な勝心に由りて生じ出づ。勝心一たび堅ければ、則ち復た過ちを改め義に従ふの心有らざるなり。

〔語釈〕

○友 兄弟の仲がいいこと。『爾雅』釈訓に、「善兄弟、為友。」（兄弟に善きを、友と為す。）とある。ここでは兄弟に対するあり方を言うか。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

〔校異二〕（『戒庵老人漫筆』巻七、今『王陽明全集』巻三二所収、「語録四條」の二條）

○皆由勝心生出 「語録四條」では「生」の字がない。

【五】

中庸論前定、只是良知不昧而已。

〔訓読〕

『中庸』の前定を論ずるは、只だ是れ良知不昧なるのみ。

〔語釈〕

○前定 まず誠を立てようとする事。『中庸』二〇章に、「言前定則不給、事前定則不困、行前定則不疚、道前定則不窮。」（言、前に定まれば則ち給かず、事前、前に定まれば則ち困まず、行ひ前に定まれば則ち疚しからず、道、前に定まれば則ち窮まず。）とあり、朱熹の注に、「此承上文、言凡事皆欲先立乎誠。如下文所推是也。」（此れ上文を承け、凡そ事は皆な先づ誠を立てんと欲するを言ふ。下文の推す所の如きは是れなり。）とある。

○不昧 あきらかな状態にすること。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【六】

董蘿石平生好善惡之意甚嚴、自舉以問。師曰、好字原是好字、惡字即是惡字。董於言下躍然。

〔訓読〕

董蘿石、平生善を好み悪を惡むの意甚だ嚴にして、自ら挙げて以て問ふ。師曰く、好の字は原よりはれ好の字にして、惡の字は即ち是れ惡の字なり、と。董、言下に於て躍然たり。

〔語釈〕

○董蘿石 諱董澐、字復宗、号蘿石、浙江省海寧の人。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所藏本」）との字句の相違はない。

〔校異二〕（『明儒学案』卷二五、「明經朱近齋先生得之」の「語録」一条）

○好善惡惡之意甚嚴 「語録」では「之意」の二字がない。

○師曰 「語録」では「陽明先生曰」につくる。

○惡字即是惡字 「語録」では「即」を「原」につくる。

【七】

天地皆仁之澤。天下歸仁、万物皆備於我也。

〔訓読〕

天地は皆な仁の澤なり。天下仁に歸すれば、万物は皆な我に備はる。

〔語釈〕

○歸仁 『論語』顔淵に、「克己復礼為仁。一日克己復礼、天下歸仁焉。」（己に克ちて礼に復するを仁と為す。一日己に克ちて礼に復すれば、天下仁に歸す。）とある。

○万物皆備於我 『孟子』尽心上。



〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【八】

脩道之謂教以下許多說話、工夫只是脩道以仁。

〔訓読〕

道を脩むる之れを教と謂ふ以下の多くの說話は、工夫は只だ是れ道を脩むるに仁を以てするのみなり。

〔語釈〕

○脩道之謂教以下 『中庸』首章。

○脩道以仁 『中庸』二〇章。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【九】

良知無動靜。動靜者、所遇之時也。不論有事無事、專以致吾之良知為念。此学者最要緊處。

〔訓読〕

良知は動靜無し。動靜とは、遇ふ所の時なり。有事と無事とを論ぜず、専ら吾の良知を致すを以て念と為す。此れ学ぶ者の最も要緊の處なり。

〔語釈〕

○動靜者、所遇之時 この語は、『伝習録』上巻の四三条および中巻の「荅陸原静菴」の「又」でも使われている。

○要緊 重要なこと。

〔校異一〕

○所遇之時也 「狩野文庫本」（「吉田氏所藏本」）では「遇」を「過」につくる。

【一〇】

実父問、心即理、心外無理、不能無疑。師曰、道無形体、万象皆其形体。道無頭晦、人所見有頭晦。以形体而言、天地一物也。以頭晦而言、人心其機也。所謂心即理也者、以其充塞氤氳而言謂之氣、以其脈絡分明而言謂之理、以其流行賦畀而言謂之命、以其稟受一定而言謂之性、以其物無不由而言謂之道、以其妙用不測而言謂之神、以其凝聚而言謂之精、以其主宰而言謂之心、以其無妄而言謂之誠、以其無所倚著而言謂之中、以其無物可加而言謂之極、以其屈伸消息往來而言謂之易、其大則一而已。今夫茫茫堪輿、蒼然嶺然、其氣之最靈者歟。稍精則為日月星宿風雨山川、又稍精則為雷電鬼怪草木花叢、又精而為鳥獸魚鼈昆虫之屬、至精而為人、至靈至明而為心。故無万象則無天地、無吾心則無万象矣。故万象者、吾心之所為也。天地者、万象之所為也。天地万象、吾心之糟粕也。要其極致、乃見天地無心、而人為之心。心失其正、則吾亦万象而已。心得其正、乃謂之人。此所以為天地立心、為生民立命、惟在于吾心。此可見心外無理、心外無物。所謂心者、非今一团血肉之具也、乃指其至靈至明、能作能知者也。此所謂良知也。然而無聲無臭、無方無體、此所謂道心惟微也。以此驗之、則天地日月四時鬼神莫非吾心之實理、不待有所彼此比擬者。古人之言合德合明、如天如神、至善至誠者、皆自下學而言、猶有二也。若其本体、惟吾而已、更何處有天地万象。此大人之學所以與天地万物一體也。一物有外、便是吾心未盡處、不足謂之學。此乙酉十月與宗範、正之、惟中間於侍坐時者、丁亥七月追念而記之、已屬渺茫、不若當時之枳然、不見師友之形骸、堂宇之限隔也。

【訓読】

実父問ふ、心は即ち理にして、心外に理無しとは、疑ひ無きこと能はず、と。師曰く、道に形体無くして、万象は皆な其の形体なり。道に頭晦無くして、人の見る所に頭晦有り。形体を以て言へば、天地は一物なり。頭晦を以て言へば、人心は其の機なり。所謂心は即ち理なりとは、其の充塞氤氳を以て言へば之れを氣と謂ひ、其の脈絡分明なるを以て言へば之れを理と謂ひ、其の流行賦畀を以て言へば之れを命と謂ひ、其の稟受一定なるを以て言へば之れを性と謂ひ、其の物の由らざる無きを以て言へば之れを道と謂ひ、其の妙用不測なるを以て言へば之れを神と謂ひ、其の凝聚するを以て言へば之れを精と謂ひ、其の主宰なるを以て言へば之れを心と謂ひ、其の無妄なるを以て言へば之れを誠

と謂ひ、其の倚著する所無きを以て言へば之れを中と謂ひ、其の物として加ふべき無きを以て言へば之れを極と謂ひ、其の屈伸消息往來するを以て言へば之れを易と謂ふも、其の実は則ち一なるのみ。今夫れ茫茫たる堪輿の、蒼然頽然たるは、其れ氣の最も饒なる者か。稍>精なれば則ち日月星宿風雨山川と為り、又た稍>精なれば則ち雷電鬼怪草木花叢と為り、又た精にして鳥獸魚鼈昆虫の屬と為り、至精にして人と為り、至靈至明にして心と為る。故に万象無ければ則ち天地無く、吾心無ければ則ち万象無し。故に万象とは、吾心の為す所なり。天地とは、万象の為す所なり。天地万象は、吾心の糟粕なり。其の極致を要むれば、乃ち天地は無心にして、人之れを心と為すを見る。心其の正を失へば、則ち吾も亦た万象なるのみ。心其の正を得れば、乃ち之れを人と謂ふ。此れ天地の為に心を立て、生民の為に命を立つるは、惟だ吾心に在る所以なり。此れ心外に理無く、心外に物無きを見るべし。所謂心とは、今の一团の血肉の具に非ずして、乃ち其の至靈至明にして、能く作し能く知る者を指す。此れ所謂良知なり。然れども声も無く臭も無く、方も無く体も無きは、此れ所謂道心惟れ微かなり。此を以て之れを驗すれば、則ち天地日月四時鬼神は壺体の実理に非ざるは莫く、彼此比擬する所有るを待たざる者なり。古人の徳を合し明を合し、天の如く神の如く、至善至誠と言へるは、皆な下学より言ひて、猶ほ二有るがごとし。其の本体の若きは、惟だ吾のみにして、更に何の処にか天地万象有らん。此れ大人の学の天地万物と一体なる所以なり。一物外に有れば、便ち是れ吾心の未だ尽さざる処にして、之れを学と謂ふに足らざるなり。此れ乙酉十月宗範、正之、惟中と与に侍坐せる時に聞ける者にして、丁亥七月追念して之れを記すも、已に渺茫に属し、当時の積然たるに若かず、師友の形骸、堂宇の限隔を見ざるなり。

〔語釈〕

○実夫 未詳。但し、後出の「語録」で「董実夫」とすることから、董深の一族かとも思われる。

○氤氲 気のもつれあうさま。『白虎通』嫁娶に、『易』繫辭下を引いて、「天地氤氲、万物化淳。」（天地氤氲として、万物化淳す。）とある。

○賦畀 あたえること。

○屈伸消息往來 『易』繫辭下に、「往者屈也。來者信也。屈信相感而利生焉。」（往とは屈なり。來とは信なり。屈信相ひ感じて利生ず。）とあり、豊卦象伝に、「天地盈虛、与时消息。」（天地の盈虚、時と消息す。）とある。

○茫茫堪輿 果てしない天地。

- 蒼然頽然 「蒼然」は日暮れの薄暗いさま。「頽然」は衰えるさま。
- 麤 粗に同じ。あらいこと。
- 花叢 はなびら。
- 為天地立心、為生民立命 張載の『張氏語録』中に、「為天地立志、為生民立道、為去聖繼絕学、為万世開太平。」（天地の為に志を立て、生民の為に道を立て、去聖の為に絶学を継ぎ、万世の為に太平を開く。）とある。なお、『近思録』には、「為天地立心、為生民立道」として引用されている。
- 無声無臭 『詩経』大雅文王に、「上天之載、無声無臭。」（上天の載は、声も無く臭も無し。）とあり、『中庸』三三章にも引用されている。
- 道心惟微 『尚書』大禹謨。
- 合德合明 『易』乾卦文言伝。
- 至善・至誠 『大学』首章・『中庸』二四章。
- 乙酉 嘉靖四年（一五二五）。
- 宗範 未詳。
- 正之 黄弘綱、字正之、号洛村、江西零県（江西省）の人。『明史』卷二八三、『明儒学案』卷一九に伝有り。
- 惟中 『稽山承語』三四条に、「王惟中」として記されている。詳細は不明。
- 丁亥 嘉靖六年（一五二七）。
- 渺茫 遠くかすかなさま。
- 堂宇之限隔 建物の範囲。ここでは守仁が講学をしていた建物のありさまをいう。

〔校異一〕

- 堂宇之限隔也 「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）では「宇」を「字」につくる。

〔校異二〕（『明儒学案』卷二五、「明経朱近斎先生得之」の「語録」二条）

- 実父問 「語録」では「董実父問」につくる。
- 師曰 「語録」では「陽明先生曰」につくる。
- 万象皆其形体 「語録」では「其」を「是」につくる。
- 以形体而言 「語録」では「而」の字がない。
- 以顯晦而言 同上。

- 所謂心即理也者 「語録」では「也」の字がない。
- 以其充塞氤氳而言謂之氣 「語録」では「而言」の二字がない。以下「以其屈伸消息往来而言謂之易」まですべて、「而言」の二字がない。
- 其氣之最麤者歟 「語録」では「麤」を「粗」につくる。
- 草木花叢 「語録」では「叢」を「藪」につくる。
- 昆虫 「語録」では「虫」を「蟲」につくる。
- 惟在于吾心 「語録」では「于」を「於」につくる。
- 能作能知者也 「語録」では「者也」の二字がない。
- 然而無聲無臭 「語録」では「然而」を「然本」につくる。
- 以此驗之～更何処有天地万象 「語録」ではこの七十二字がない。
- 此乙酉十月与宗範～堂宇之限隔也 「語録」ではこの五十一字がない。

【一一】

誠者天之道、言実理之本体。思誠者人之道、聖賢皆謂之。思誠、惟有工夫則人道也。

【訓読】

誠は天の道とは、実理の本体を言ふなり。誠を思ふは人の道とは、聖賢も皆な之れを謂ふ。誠を思ふは、惟だ工夫有れば則ち人の道なり。

【語釈】

○誠者天之道 『中庸』二〇章に、「誠者、天之道也。誠之者、人之道也。誠者不勉而中、不思而得、從中道、聖人也。」（誠は、天の道なり。之れを誠にするは、人の道なり。誠は勉めずして中り、思はずして得、從容として道に中る、聖人なり。）とあり、朱熹の注に、「誠者、真実無妄之謂、天理之本然也。」（誠とは、真実無妄の謂にして、天理の本然なり。）とする。また、『孟子』離婁上に、「是故誠者、天之道也。思誠者、人之道也。」（是の故に誠は、天の道なり。誠を思ふは、人の道なり。）とあり、朱熹の注に、「思誠者、欲此理之在我者皆実而无偽、人道之当然也。」（誠を思ふは、此の理の我に在る者は皆な実にして偽り無きを欲するものにして、人の道の当然なり。）とする。

【校異一】

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【一二】

乾卦通六爻、作一人看、只是有頭晦、無優劣。作六人看、亦只有貴賤、無優劣。在自己工夫上体験、有生熟少壯彊老之異、亦不可以優劣論也。

〔訓読〕

乾卦は六爻を通じ、一人と作して看るも、只だ是れ頭晦有るのみにして、優劣無し。六人と作して看るも、亦た只だ貴賤有るのみにして、優劣無し。自己の工夫の上在りて体験すれば、生熟少壯彊老の異なること有るも、亦た優劣を以て論ずべからざるなり。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

〔校異二〕

『戒庵老人漫筆』巻七（今『王陽明全集』巻三二所収、「語録四条」の三条）と一致する。

【一三】

問、志道掬徳依仁遊芸。曰、芸即義也。即事曰芸、即心曰義。即孔子自序志学之旨也。

〔訓読〕

道に志し徳に掬り仁に依り芸に遊ぶを問ふ。曰く、芸とは即ち義なり。事に即すれば芸と曰ひ、心に即すれば義と曰ふ。即ち孔子自ら志学の旨を序ぶるなり、と。

〔語釈〕

○志道掬徳依仁遊芸 『論語』述而に、「子曰、志於道、掬於徳、依於仁、遊於芸。」（子曰く、道に志し、徳に掬り、仁に依り、芸に遊ぶ、と。）とある。なお、この問題については、『伝習録』下巻四〇条においても述べられている。

○志学 『論語』為政。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【一四】

択不処仁、非択里也。

〔訓読〕

択びて仁に処らずとは、里を択ぶに非ざるなり。

〔語釈〕

○択不処仁 『論語』里仁に、「子曰、里仁為美。択不処仁、焉得知。」（子曰く、里は仁を美と為す。択びて仁に処らざれば、焉んぞ知るを得ん、と）とあり、朱熹の注に、「里有仁厚之俗為美。択里而不居於是焉、則失其是非之本心、而不得為知矣。」（里は仁厚の俗有るを美と為す。里を択びて是に居らざれば、則ち其の是非の本心を失ひて、知と為すを得ず。）とする。守仁は、朱熹が住居の選択の大切さを説いたものと解釈するのに反対しているのである。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【一五】

以約失之者鮮、凡事予則立也。

〔訓読〕

約を以て之れを失ふ者は鮮しとは、凡そ事は予めすれば則ち立つなり。

〔語釈〕

○以約失之者鮮 『論語』里仁。

○凡事予則立 『中庸』二〇章。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【一六】

一友自負無私意。適其從兄、責僕人於私高、自悔深切、入以告於師、且請教。此友在傍微哂。師顧曰、此非汝之私意乎。見兄之有過、幸己之無敗露、私意重矣。此友方知、私意是如此。

〔訓誥〕

一友私意無きを自負す。適其の從兄、僕人を私高に責め、自ら悔いること深切にして、入りて以て師に告げ、且に教を請はんとす。此の友傍らに在りて微しく哂ふ。師顧みて曰く、此れ汝の私意に非ずや。兄の過ち有るを見て、己の敗露無きを幸いとすは、私意重し、と。此の友方に知る、私意是れ此の如きを。

〔語釈〕

- 私高 私邸。
- 敗露 悪事や隠し事が発覚すること。

〔校異一〕

- 師顧曰 「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）では「曰」を「四」につくる。

【一七】

心之良知、謂之聖。

〔訓誥〕

心の良知、之れを聖と謂ふ。

〔語釈〕

- 心之良知、謂之聖 『孔叢子』記問に、「心之精神、是謂聖。」（心の精神、是れを聖と謂ふ。）とある。（なお四部叢刊本には、「心之精神、是乎聖。」とある）。

〔校異一〕



「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【一八】

良知無有不独、独知無有不良。

〔訓読〕

良知は独ならざるもの有ること無し、独知は良ならざるもの有ること無し。

〔語釈〕

○独 『中庸』首章の「慎独」の朱熹の注に、「独者、人所不知而已所独知之地也。」（独とは、人の知らざる所にして己独り知る所の地なり。）とある。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【一九】

問乾坤二象。曰、本体要虚、工夫要実。

〔訓読〕

乾坤二象を問ふ。曰く、本体は虚なるを要し、工夫は実なるを要す、と。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

〔校異二〕（『遺言録』上巻四〇条）

○問乾坤二象。曰 『遺言録』ではこの六字がない。

【二〇】

合着本体、方是工夫。做得工夫、方是本体。又曰、做得工夫、方見本体。又曰、做工夫的、便是本体。

〔訓読〕

本体に合（著）するは、方に是れ工夫なり。工夫を做し得るは、方に是れ本体なり、と。又た曰く、工夫を做し得れば、方に本体を見る、と。又た曰く、工夫を做すのは、便ち是れ本体なり、と。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

〔校異二〕（『伝習録欄外書』卷下四十一条注所引、閩東本『伝習録』）

- 合著本体 「閩東本」はこの前に、「先生日」の三字があり、「合着本体的」につくる。
- 方是工夫 「閩東本」は、「是功夫」につくる。
- 做得工夫 「閩東本」は、「做得功夫的」につくる。
- 方是本体 「閩東本」は、「是」を「識」につくる。
- 又日～便是本体 「閩東本」は、この二十字がない。

【二一】

師設燕以投壺楽。諸友請教。曰、今此投壺、俱要位天地育万物。衆皆默然。投畢賓退。実夫不悟、以問正之。正之曰、難言也。曰、此会何人得位育意。正之曰、惟弘綱三矢、自此而出。明旦衆入謝燕。実夫起問、師曰、昨日投壺、惟正之三矢得此意。実夫凜然。

〔訓読〕

師、燕を設け投壺を以て賓を楽しましむ。諸友、教を請ふ。曰く、今、此の投壺は、俱に天地を位せしめ万物を育するを要す、と。衆皆な默然たり。投畢はり賓退く。実夫悟らずして、以て正之に問ふ。正之曰く、言ひ難きなり、と。曰く、此の会、何人位育の意を得たりしや、と。正之曰く、惟だ弘綱の三矢のみ、此よりして出づ、と。明旦衆入りて燕を謝す。実夫起ちて問ふに、師曰く、昨日の投壺は、惟だ正之の三矢のみ此の意を得たり、と。実夫凜然たり。

〔語釈〕

- 燕 宴会のこと。
- 投壺 矢を壺に投げ入れる、宴会の遊び。

○位天地育万物 『中庸』首章に、「致中和、天地位焉、万物育焉。」（中和を致せば、天地位し、万物育す。）とある。

○実夫 一〇条に既出。

○正之 黄弘綱。一〇条に既出。

○凜然 心のひきしまるさま。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。